

8月5日
感想

安野発電所フィールドワークに参加して

アメリカ・スクリプス大学学生 三戸 絵美里

2025年10月、個人的な体験から導かれ、安野発電所への中国人強制連行について知った。きっかけは大学の課題で家族史を書くことになり広島に住む祖母に話を聞いたことだった。

1945年夏、当時小学2年生だった祖母が一番上の姉とともに広島市内の実家から、知人の伝を頼って県北西部の安野村・坪野に疎開した。家族が恋しくて、2階のベランダからよく市内の方を見ていた。8月6日の朝も同様にしていたら、きのこ雲が空高く上がり、紙切れのようなものがひらひらと落ちていくのが見えた。その午後、坪野にも黒い雨が降った。外に干してあった洗濯物にべっとりと黒い液が付いたのを覚えているようだ。

被爆者手帳を申請する際、祖母が当時の居所を証明するのに頼った記憶の一つが、近くに建設中の水力発電所があったことだ。「安野発電所」という名前を祖母から聞いた私はすぐにパソコンで検索した。

「安野発電所への中国人強制連行」というタイトルのウェブサイトが目止まった。1944年5月から46年12月にかけて、土居の取水口、山中を通る7.7kmの導水トンネル、坪野の水力発電所が建設された。一連の工事を担当した西松組は日本政府に申請し、中国から360人を連行して強制労働に就かせた（内3人は日本に辿り着く前に船中で亡くなった）。非人道的な史実の数々に目を疑った。

広島といえば原爆被害、広島といえば国際平和都市という一面的な認識が根底から覆された。「広島」や日本の加害についてより深く知りたいと考え、広島における中国人・朝鮮人の強制労働、その歴史を掘り起こし継承してきた市民活動を大学の卒業研究のテーマに選んだ。

8月5日、フィールドワーク「安野発電所への中

国人強制連行・被爆の歴史を歩く」に参加した。午前8時、集合場所の平和公園には翌日の式典に向けて白いテントが整然と並んでいた。私を含めて14人の参加者と継承する会の川原さん、中さんがマイクロバスに乗り込み、安野発電所がある安芸太田町へ向かった。現地で同会の岡原さんと土屋さんご夫婦も合流した。

各現場で強制労働の実態について説明を聞き、DVDを視聴して被害者の証言や裁判闘争について学んだ。

日程

- 8:00 平和公園出発
DVD鑑賞「和解～広島・中国人強制連行問題の軌跡」
- 9:10 中国電力安野発電所前
「安野 中国人受難之碑」を見学した後、坪野貯水槽まで約50m歩いて上がる
- 10:40 善福寺
学習：強制連行され日本で死亡した中国人の遺骨について、善福寺と遺骨について、天津追悼活動について
DVD鑑賞「花岡被難烈士遺骨帰国」
昼食・休憩
学習：強制連行された中国人被爆者について
DVD鑑賞「トンネルに風が吹いた日～強制連行・被爆した中国人を追って」
- 13:30 津浪中国人収容所跡、西谷立坑、香草中国人収容所跡・工事現場跡、土居取水口を順に見学
- 15:30 土居を出発
DVD鑑賞「50年目の叫び―広島・安野への中国人強制連行問題の真相」
- 16:30 平和公園到着

一日を通して、たくさんの情報を目から、耳から、肌から受け取り、考えた。しかし、このフィールドワークを通して私の頭の中にずっと居座っていた感覚は「わからない」だった。

中国電力安野発電所

坪野収容所から立坑の工事が行われた坪野貯水槽へ続く 50m の急な上り坂。自然と息が上がり、貯水槽に着く頃には空腹で力が抜けた。当時、昼夜二交代の 12 時間労働に従事した中国人労働者たちは、日勤では昼になると、マントウ一つの昼食のために坂を下り、また上った。セメント袋を肩に担いで上ることもあった道は、冬には膝あたりまで積雪があったそうだ。収容所と作業場間の移動だけで相当の体力を奪われただろう。

なぜこれほどの重労働に対して食事がマントウ一つだけなのか。なぜ、せめて昼食を持ち上がり、体力を温存させなかったのか。少しでも労働者の身体について考えたならこのような理不尽を強いることはなかったのではないか。

香草工事現場跡

香草で働いていた宋継堯(ソン ジィイャオ)さんはトロッコの転落事故により両目を失明した。中国人労働者は 2 人 1 組で、導水トンネル工事で粉碎された石の塊を木造のトロッコの荷台に載せてトンネルの外にある土捨て場へ運んだ。事故現場はほぼ直角に曲がるカーブだった。加えて、歩いていても自然に加速してしまうほど勾配のきつい下り坂になっている。その道路に置いただけの軌道の上を大量の石と人を乗せたトロッコが走れば、コントロールが効かなくなり横転するのは目に見えている。なぜそのようなことを想定しなかったのか。横転もやむなしと考えたのか？そもそも考えすらしなかったのか？疑問が湧いてくる。

他にも、狭いスペースに整地もせずに約 100 人が寝食する収容所を建てたり、真冬の雪道をまともな

履き物もなしに歩かせたり。日本政府や西松組が現場の労働者のことを配慮すべき対等な人間とみなしていなかったとしか考えようがない。

フィールドワークを通して中国人労働者が行った作業や生活の詳細を知ると、当時の強制労働の実態がいかに理不尽で、異様であったかがわかった。

このように「普通に考えたらわかること」をわからなくさせてしまうのが戦争であり、植民地支配・暴力なのだろう。

当時の工事に関わった日本人を「悪」と切り捨てて「私とは違う、私には彼らの考えが理解できない」と言うのは簡単だ。しかし、今私がやるべきことは、人間的な感覚を麻痺させる原因や、それに抗う方法を考えることだと思う。

これまで学校教育や報道を通じて私は日本の加害の歴史を十分に学ぶことができなかった。あの時継承する会のウェブサイトを開かなければ、この歴史事実を知らずに過ごしていたと思うとぞっとする。

想像を絶する辛い経験について証言してくれた強制連行の被害者の方々と、それを受け止めて約 35 年間にわたり調査・裁判支援・継承活動を行ってきた方々のおかげで私はこれらの史実を知ることができた。あらためて感謝を伝えたい。

また、この度のフィールドワークで継承する会のみなさん、バスの運転手さん、善福寺の藤井ご住職、中国電力職員のお二方から貴重な学びの機会をいただいたことに心から感謝したい。

私の中にはまだ答えが出ていない問いがたくさんある。今後も国内外の戦争の記憶を伝える場を自ら訪ねて考え続けたい。